

常光寺々報

2015年7月

お盆法要

七月十二日(日) 昼一時半～四時

武蔵野大学学院長

講師 田中 教照 先生

七月十三日(月) 昼一時半～四時

法話 当山住職

※七月二十三日のやすらぎ法座と

八月三日の光輪法座はお休みです。

旧盆法座

八月十三日(木) 朝十時～十二時

法話 住職

ご講師の田中教照先生には、本堂を解体する直前の永代経法要にご出講をいただいで以来の、三年ぶりのご縁です。

朝顔は バカな花だよ
根のない竹に

いのちまでもと からみつく
何年か前のご法話で田中先生から教わりました。自分の心さえも当てにならないこの世に、本当に当てになるものは何か。究極的に頼りになるものは何か。そこを聞かせてもらうのが仏法聴聞であり、仏法に遇うということでありましょう。暑い中ですが、お参り・ご聴聞いただきますよう、ご案内申し上げます。

会計報告

駐車場の新設からご本堂の大修復工事まで八年もかかりました。これらの事業の会計報告が六月二十一日

の総代世話人会並びに発起人会において承認されましたので、別紙のとおりご報告を申し上げます。

記念品引換え

二百十年ぶりに大修復されたご本堂の落慶法要も、おかげさまで五月晴れに恵まれて賑やかに執り行うことができました。大勢の皆さまにお参りをいただき、本当にありがとうございました。今は一人、本堂を眺めながら、これで孫子の代までも安心して聴聞できる救いの場所ができたと喜び、安堵いたしております。尚、記念品の引換はまだ行っておりません。(但し、生ものははずしてあります)当日ご欠席の方も引換券をご持参のうえ、受付または玄関までお申し出ください。(八月末日までお願いします)

夕 焼 け

吉 野

弘

いつものことだが／電車は満員だった。そして／いつものことだが／若者と娘が腰をおろし／としよりが立っていた。／うつむいていた娘が立って／としよりに席をゆずった。／そそくさとしよりが坐った。／礼も言わずとしよりは次の駅で降りた。／娘は坐った。／別のとしよりは娘の前に／横あいから押されてきた。／娘はうつむいた。しかし／又立って／席を／そのとしよりにゆずった。／としよりは次の駅で礼を言って降りた。／娘は坐った。二度あることは と言いつつ／別のとしよりは娘の前に／押し出された。／可哀想に／娘はうつむいて／そして今度は席を立たなかつた。／次の駅も／次の駅も／下唇をキュッと噛んで／身体をこわばらせて――。／僕は電車を降りた。／固くなってうつむいて／娘はどこまで行つたらう。やさしい心の持主は／いつでもどこで

も／われにもあらず受難者となる。／何故って／やさしい心の持主は／他人のつらさを自分のつらさのように／感じるから。／やさしい心に責められながら／娘はどこまでゆけるだろう。／下唇を噛んで／つらい気持で／美しい夕焼けも見えないで。

吉野弘詩集(現代詩文庫)より

『夕焼け』は吉野弘の代表作の一つである。

心のやさしい娘は二度も席を立ててゆずった。でも、としよりは二人とも一駅で降りてしまわれた。さすがに三人目になれば娘はためらった。――席をゆずるべきか。否、また次の駅で降りてしまふのじやないかと。――しかし、としよりは次の駅も、その次の駅でも降りない。娘は身体をこわばらせ下唇をキュッと噛んだままうつむいてしまった。

そんな光景をみていたこの詩人は、「やさしい心に責められながら、娘はどこまでゆけるだろう」と電車を降りてからも案じている。そして、夕日に向かつて歩きながら、「あの娘はこの美しい夕焼けさを見ることができずにいるのか」と、やさしく思いやつているのである。